

OITA ART FESTIVAL 2025  
ART HOP w@nder

9.26 fri → 10.26 sun



ARTISTS THE CABIN COMPANY / HAYASHI Natsumi / FUJITA Yohei / EBIHARA Yasushi  
SUZUKI Yasuhiro / TODO / OGAKI Mihoko / IHARA Shinji / namstrops / KITAMURA Naoto etc

# 回遊劇場 w@nder

OITA ART FESTIVAL 2025  
ART HOP w@nder

大分アートフェスティバル2025  
[回遊劇場w@nder] 記録集



# CONTENTS

## 目次

ごあいさつ	1	アートイベント	25
大分市アートを活かしたまちづくり推進会議		鈴木 康広 「空気の人」	
会長 有松 一郎		アーティストトーク	
		北村 直登 ライブペインティング	
大分アートフェスティバル2025「回遊劇場w@nder」概要	2	ザ・キャビンカンパニー トークショー	
		んまつー波斯 ダンスパフォーマンス	
ディレクターコメント	3	ディレクターズツアー	
「回遊劇場w@nder まちの記憶と出会うアートフェスティバル」		鈴木 康広 ワークショップ／トークショー	
ディレクター 宇都宮 壽／大分市美術館館長		林 ナツミ トークショー／[#SALVATION in OITA]ツアー	
		ポールさん アートツアー	
参加アーティスト	9	まちなかアートギャラリー	30
ザ・キャビンカンパニー	10		
林 ナツミ	11	デジタルスタンプラリー	31
藤田 洋平	12		
海老原 靖	13	クラウドファンディング	32
鈴木 康広	14		
藤 堂	15	コラボ連携企画	33
大垣 美穂子	17		
井原 信次	18	ポールさん	38
んまつー波斯	19		
北村 直登	20	公式グッズ	38
大分駅前ウォールアート 参加アーティスト／団体	21	パブリックアート	39
北村 直登			
パラボラ舎		報道記録・広報活動	41
SATOSHI			
河野 真歩		マップ	43
大分県立芸術文化短期大学			
一般公募パブリックアート	24		
市川 陽加			
安楽 悠陽			

## ごあいさつ

大分アートフェスティバル2025「回遊劇場w@nder」  
アートを活かしたまちづくり推進会議

会長 有松 一郎

この度、大分アートフェスティバル2025「回遊劇場w@nder」の記録集を皆様にお届けできることを、大変光栄に思います。

本記録集は、2025年9月26日から10月26日までの31日間にわたり開催されたフェスティバルの軌跡、すなわち、大分というキャンパスに刻まれたアートの感動と興奮の記録であります。

今回のフェスティバルは、「w@nder」というテーマのもと、大分市中心市街地を舞台に、国内外で活躍されている10組のアーティストの作品を展開いたしました。また、公募で選ばれたアーティストによる「シャッターアート」、駅前に登場した「ウォールアート」、まちなかの店舗をギャラリーに見立てた「まちなかアートギャラリー」、「アートイベント」などさまざまな企画を実施いたしました。この記録集を通じて、私たちは、あの場で実際に作品と対峙し、大分の風土とアートが織りなした特別な空気感を追体験できることでしょうか。

会場を巡る来場者の皆さまの驚き、中心市街地の各商店街や企業の方々の惜しみないご協力、そして作品と真摯に向き合ったアーティストやボランティアスタッフの情熱。この記録集には、作品データだけでなく、そうした計り知れない感情と、フェスティバルを支えた無数の物語が詰まっています。

アートは一過性のイベントではなく、地域に根付き、人々の意識を変容させる持続的な力を持っています。本記録集が、関わってくださったすべての皆さまの記憶を呼び起こし、そして今後のアート活動や創造都市実現の源泉となることを心より願っております。

最後に、多大なご尽力とご理解を賜りましたすべての関係者、ご協力企業の皆さま、そしてフェスティバルを愛し、彩ってくださった来場者の皆さまに、改めて感謝を申し上げます。

大分のアートの歴史における確かな一歩として、このアートフェスティバルが未来へ語り継がれていくことを祈念するとともに、皆さまにご一読いただければ幸いに存じます。

回遊劇場  
w@nder

OITA ART FESTIVAL 2025  
ART HOP w@nder

大分アートフェスティバル2025 [回遊劇場w@nder]  
9.26 fri → 10.26 sun

2015年に始まった「大分アートフェスティバル」は、3年に一度、大分市の中心市街地を舞台に開催される回遊型のアートフェスティバルである。2025年は「回遊劇場w@nder(ワンダー)」と題して、大分の街に宿る「ゲニウス・ロキ(Genius Loci/土地の精霊・場の個性)」を、アーティストたちが読み解き、街のあちこちにアート作品を展開し、観客が街を巡り(「wander(さまよう)」)、場所に秘められた物語と出会い、体感する(「wonder(驚く)」)ことで“劇場型都市体験”を創出。アートツアー、ワークショップ、商店街店舗を会場とするアートギャラリー企画など、様々な催しも開催した。

# 回遊劇場w@nder

## まちの記憶と出会うアートフェスティバル

「回遊劇場w@nder」ディレクター／大分市美術館館長

宇都宮 壽

### 1. アートによる「おおいの記憶」の表出、そして出会い

大分市は、2015年にトイレを舞台にしたアートの祭典というコンセプトで開催した「おおいのトイレナール2015」を起点に、文化・芸術の持つ創造性を地域活性化と産業振興に活かし、アートの力を活用して地域の魅力づくりや市民の地域を誇る気持ちの醸成、創造的な人材の育成や地域経済の活性化を図るため、「アートを活かしたまちづくり事業」に取り組んでいる。

その一環として、2018年には「第33回国民文化祭・おおい2018」および「第18回全国障害者芸術・文化祭おおい大会」における大分市リーディング事業を展開し、2019年以降はアートフェスティバルを継続的に実施してきた。これらの取り組みには「回遊劇場」という総称を付し、以下の事業を実施している。

#### 2018年「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」

大分市内中心部を劇場や美術館に見立て、まちなかのパブリックな空間や日常空間を舞台に作品を展開。まちに回遊性を持たせるがコンセプト。ウォールアート、空き店舗を舞台とした作品展示、まちなかにあふれる野外彫刻などの紹介を行った。

#### 2019年「回遊劇場SPIRAL」

「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」の続編となるアートフェスティバル。大分市がSPIRAL(渦)となり、魅力を発信し、ホテルや公共施設などのパブリックな空間と、新聞社の旧輪転機室と旧紙庫など普段立ち入れない場所を使用してのインスタレーション(空間全体を作品として表現する手法)展示などを行った。

#### 2022年「回遊劇場AFTER」

大分アートフェスティバル 2019「回遊劇場SPIRAL」の続編となるアートフェスティバル。「アート×食×まち歩き」をテーマとし、空きビルを拠

点として利用した会場での作品展示に加え、飲食店との連携による作品展示やコラボメニューの提供、ウォールアートの制作、アートイベントなどを行った。

今回の「回遊劇場w@nder」を企画するにあたり、まちなかを舞台にアートをインストールすることで来訪者の回遊性を高めるという基本的な考え方は、これまで展開してきた「回遊劇場」シリーズと同じ軸とすべきであると考えたが、その理念をさらに拡張し、単にまちに作品を点在させるだけではなく、大分のまちなかを取り巻く「記憶」や「風土」そのものに改めて焦点を当てることを企図した。

古くから受け継がれてきた景観や地域の文化、人々の日常の営みなど、目に見えにくく、時に忘れられがちなまち固有の価値に光を当て、それらをアーティストたちが独自の視点で掘り起こし、現代にふさわしい表現として再解釈・再提示することを大きなねらいとしている。いわば、大分という都市空間に宿る「ゲニウス・ロキ(Genius Loci/土地の精霊・場の個性)」を読み解く試みである。

アートフェスティバル期間中、商店街、公共施設、地下道、駅構内など、普段はただ通り過ぎるだけの場所が、それぞれの物語を秘めた展示空間へと姿を変える。作品鑑賞は、決められた会場に足を運ぶのではなく、観客自身がまちなかを自由に歩き、道に迷いながら作品と出会い、偶然の発見を楽しむ体験へと変わる。まるで宝探しのように、まちを歩く営みそのものが観覧行為となる点が大きな特徴である。

さらに、作品鑑賞にとどまらず、アートツアーやワークショップなど、多彩なプログラムを通して、土地の物語により深く関わる機会も用意した。観客は、作品を「見る」だけでなく、アーティストと共に場所を「読み解き」、記憶を「共有」し、まち全体に広

がる文化の層を身体的に体験することができる。

こうした試みを通じて、「wander(さまよう/歩き回る)」という身体的な行為と、「wonder(驚き・不思議)」という発見の感覚が重なり合い、日常の風景があたらしい意味を帯びて立ち現れる瞬間を創出する。本アートフェスティバルが目指したのは、まち全体がひとつの舞台として呼吸し、訪れる人びとに新たな視点と感性の刺激をもたらす、比類なきアート体験を実現することであった。

### 2. 10組の素晴らしい創造・媒介者たち

本アートフェスティバルの理念を実現するためには、単に地域に関わるアーティストではなく、大分という土地が内包する記憶や風土を、柔軟な想像力と確かな表現力によって掘り下げ、それを鑑賞者の感覚に届くかたちへ翻訳できる力量が不可欠である。

その視点から、アーティストの選定に際しては以下の観点を重視した。

#### 1. 土地の記憶や環境と対話する意志が強い作家であること

単体の作品制作にとどまらず、場所そのものを読み解き、作品化する姿勢があること。

#### 2. 現代的なテーマや方法論において確かな表現力を持つこと

造形力はもちろん、複雑なコンセプトを市民の体験として成立させることができる力。

#### 3. 大分の土地から新たな意味を汲み取れる視点を備えていること

先入観のない視界を確保するため、県外からの参加を含む多様なバックグラウンドを歓迎した。

#### 4. ジャンルの広がり、まちの多層性を映し出すことにつながる

平面・写真・彫刻・絵本・立体・ダンスなど、表現領域が異なるアーティストを組み合わせることで、大分という都市空間に潜む多様な「声」を浮かび上がらせることを目指した。

これらの基準を満たし、本企画の主旨を共に探求できると確信できたアーティストこそが、今回選

出した10組である。同時に、国内外には素晴らしい作家が数多く存在するが、本プロジェクトが目指す「土地との共創」「記憶の掘り起こし」という課題に対し、最も大分という場と響き合う可能性をもつ10組に絞り込んだ。

それぞれのアーティストのプロフィールや作品の写真、ステートメントなどは、「ARTISTS参加アーティスト」(9~20ページ)をご覧ください。と思うので、ここでは、各アーティストと作品のポイントについて記すこととしたい。

#### ザ・キャビンカンパニー

絵本作家/美術家ザ・キャビンカンパニーによる《キメラブネ》。

高さは人の背丈ほど。JR大分駅コンコース中央に設置された縦4メートル、横3メートルの台座の上に立ち、異形の生き物が行き交う人々を鋭く見つめる。この「キメラブネ」は、大分の歴史を題材とした作品。戦国時代、府内のまちに南蛮船が来航し、海外の文物がもたらされた出来事を、虎・象・孔雀が融合した怪物の姿によって現代に甦らせた。

会期中には、彼らが大分への想いや創作の日々について語るトークイベントも行われた。

#### 林ナツミ

写真家・林ナツミは、トキハ本店を会場に作品を発表。林は、トキハのひまわり柄の紙袋を手に、自身が宙に浮く『本日の浮遊』シリーズの1枚を、エントランス横の壁面に大画面で展示した。10年間を過ごした大分で、街の幸せの象徴であるトキハのひまわり柄の紙袋を手に『本日の浮遊』を撮影し、いつかこの写真をトキハで展示し、紙袋にしてみたいと夢見ていたという。

今回、その夢が実現し、林と次に紹介する藤田の作品が表裏に印刷された紙袋も制作された。

さらに、土日祝日には、来場者が林の『本日の浮遊』のように宙に浮かんだ写真を撮影し、一般的な写真サイズで出力して作品のそばに貼る参加型の企画も行われた。会期中には、トークショーや作家と巡る「#SALVATION in OITA」ツアーも開催した。

#### 藤田洋平

美術家・藤田洋平は、トキハ本店の北側の壁面に「つながるおじぎ」と題した大きな壁画を制作した。

太陽に向かってまっすぐに伸び、やがて実を結んで深く頭を垂れるひまわりの姿に、藤田は「お辞儀をするような礼節と感謝の心」を感じたという。ひまわりを通して「出会い」と「感謝」を表現し、制作の機会を与えてくれた人々への感謝の気持ちも込めている。

ひまわりが万国旗のように連なっていく様子には、世界の人々が互いを敬い、平和が続くことへの願いも重ねられている。こうした思いをもとに本作品は生まれた。

### 鈴木康広

アーティスト・鈴木康広は、アートブラザの60年代ホールに代表作の「まばたきの葉」と小型の「空気の人」2体を展示した。

鈴木がこの空間を選んだ背景には、アートフェスティバルのテーマである「大分の記憶」や「ゲニウス・ロキ」との関わりがある。アートブラザを設計した磯崎新や、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズの多くの作家が大分出身、あるいは大分と縁を持つことを踏まえ、鈴木自身もまた、そうした先達の試みや精神への敬意と影響を強く意識しながら、自身の作品をこの歴史的・場所的文脈の中に響かせたいという思いを抱いていたからであると考えられる。

会期中には、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズのメンバーである赤瀬川原平らによる「路上観察学会」の流れを汲むワークショップとトークショーを開催したほか、ギャラリー竹町ドーム広場に全長25メートルの「空気の人」が登場し、多くの人々を驚かせた。

### 藤堂

彫刻家・藤堂について記すが、藤堂に続く、美術家・大垣美穂子、海老原靖、井原信次の4名には、ある共通の絆がある。それは、2019年に45歳の若さで逝去した美術家・佐藤雅晴と、何らかの形で繋がりを持つ者たちであるという点である。藤堂と大垣はドイツ・デュッセルドルフで共に芸術活動に取り組み、海老原は芸大受験時に佐藤から指導を受け、井原もまた創作活動を見守られる関係にあった。

大分で生まれ育ち、国内外で活躍した佐藤が出会い、切磋琢磨した同志たちが、「回遊劇場w@nder」という事業をきっかけに大分に集結し、「大分の記憶」や「ゲニウス・ロキ(地霊)」というテーマのもと、作品を構想・発表したのだからである。

藤堂は、2025年に取り壊された前回の回遊劇場のメイン会場であったNTT府内ビルの瓦礫に積層ガラスを組み合わせた作品や、自身のルーツである愛媛の佐多岬と大分の関崎の石を積層ガラスをはさんでドッキングさせた作品などを制作。アートブラザのアートホールや磯崎新建築展示室に展示した。

### 大垣美穂子

大垣は、これまで自身が関わってきた様々な国籍、ジェンダー、皮膚の色、言語、宗教をもつ人々の名前から一文字を選び、その文字を古代の文字に置き換えて和紙に大筆で墨書した作品群を制作した。これら一枚一枚のドロ잉は、上から包み込むように白の胡粉で銀河が描かれており、最終的には135枚におよぶ作品が連なって大きな一つの波を形成する。アートブラザのアートホールでは、その作品が静かに風に揺らめくインスタレーションとして展示された。

### 海老原靖

海老原は、佐藤が高校時代に通ったシネマ5を会場に選び、同館で初上映された映画『ベルリン・天使の詩』の「手」のシーンをモチーフとした20点の絵画と、佐藤のアニメーション作品「Hands」を展示。さらに九電EVスクエアでは、映画に登場する「つながる手」を主題とした7点の絵画を発表した。

### 井原信次

井原は日頃は平面作品をてがける作家であるが、本事業では、佐藤の「死神先生」シリーズに登場する〈ガイコツ〉に捧げるオマージュとして、「メキシコの死者の日」に着想を得た骸骨型の大作の制作に挑戦。アートブラザのアートホールに展示した。

この作品は、来場者がマリーゴールド色の紙で花を作り、作品内に飾る参加型の形式とすることで、命のつながりを祝う構成となっているものである。

佐藤の活動の軌跡と、彼が結んだ国内外のアーティストたちとの関係性が、藤堂・大垣・海老原・井原らの作品を通して大分の地に蘇ったのである。

### んまつーポス

宮崎を拠点に国内外で活動するダンスカンパニー「んまつーポス」。彼らの名前は「スポーツマン」を逆から読んだものに由来し、物事を逆さからとらえ新たな価値を生み出す姿勢を示している。本事業では、日本最古のSFともいわれる「竹取物

語」を題材にした新作「短編集『竹を切る人の物語』」を発表。JR大分駅の大型ビジョンなどで上映されるほか、10月11日(土)から13日(月・祝)にかけて、市内各所で大分の土地や人々の暮らしと響き合うダンスパフォーマンスを展開した。

### 北村直登

大分を拠点に活動する画家・北村直登は、コンバルホール1階のガラス壁面12枚に、干支をモチーフとした作品「ひとめぐりのなかまたち」を制作した。干支の仲間をぐるりと並べてみることで、「時間の流れ」や「人とのつながり」といったものが自然に立ち上がってくるという。街を歩きながら、ふと懐かしい風景に出会ったり、これまで見過ごしていた面白さに気づいたりすることがあるように、この十二支の姿もまた、道行く人びとに小さなwander(さまよう)やwonder(驚き)をもたらす存在であると感じられる。

あわせて北村は、大分駅前に、戦国期に豊後を治め、キリシタン大名として知られる大友宗麟の姿を、北村ならではの鮮やかな色彩と造形で現在のまちに立ち上がらせた。

このように、各アーティストは本事業の意図を十分に理解したうえで、場所の選定から作品制作、関連イベントの実施に至るまで、私たちの期待をはるかに上回る取り組みを行い、本事業の中核を担った。

## 3. まちと人が 出会う、交わる、ひらく企画・仕かけ

### 1. アートを通じた人材育成とまちの共創・連携

これら参加アーティストの作品やイベントを核としつつ、若手アーティストへの発表の場の提供や運営サポートスタッフの育成などを通じた地域に根ざした創造的人材の成長を支援する企画。アーティストと市民とが共にまちを創り上げる「共創」の機会の提供。同時期に開催する各種の企画や企業・団体等との連携にも取り組んだ。以下にその主なものを列記する。

①一般公募によるパブリックアート作品の制作：市川陽加、安楽悠陽(ともに大分県立芸術文化短期大学の学生)によるシャッターアート作品が登場。

②大分駅前ウォールアート：JR大分駅前にも、北村直登、パラボラ舎、SATOSHI、河野真歩、大分県立芸術文化短期大学の学生による大きなウォールアート作品が登場。「SATOSHI(スプレーアート)」のライブペインティングも開催した。

③ポールさんアートツアー：ポールさん(ボランティアスタッフ)による作品を巡るアートツアーの開催。

④デジタルスタンプラリー「まちなかw@nder Journey」：既存のパブリックアート作品や今回の参加アーティストの作品、各種アートイベントなどを巡るデジタルスタンプラリーの実施。

⑤まちなかアートギャラリー：まちなかの店舗をギャラリーに見立て、大分市アーティストバンクPOARTや学生等の作品を展示、販売も行った。

⑥JR九州との連携：  
・883系特急ソニック特別ラッピング「W@NDER ART EXPRESS」：「回遊劇場w@nder」と「SONIC30周年」のコラボレーション企画。ザ・キャビンカンパニー「キメラブネ」がラッピングされた883系特急ソニックを会期中運行した。  
・JR九州ウォーキング：西大分駅を出発し、大分アートフェスティバルを回遊し大分駅にゴールするウォーキング企画を9月27日(土)に開催した。

⑦トキハ本店との連携：  
・『本日の浮遊』フォトプリントイベント：林ナツミの『本日の浮遊』の浮遊写真を真似して、自分の『本日の浮遊』をスマートフォンで撮影できるフォトスポットをトキハスクエアに開設。撮影した写真をトキハ本店内でプリントや掲示ができる参加型の企画を実施した。  
・林ナツミ・藤田洋平作品を両面にプリントしたショッピングバッグ：トキハ本店でお買い上げのお客様を対象に5000部限定で配布した。

⑧キヤノンおよび大分キヤノンとの連携：『本日の浮遊』フォトプリントイベントにおいて、撮影した写真をトキハ本店内でプリントする機材や技術的なサポートをいただいた。

⑨「おおいたw@nder夜話」との連携：大分市文化財化課の専門職員や大分県立美術館(OPAM)の学芸員による歴史とアートのトークイベントを開催した。

⑩「OITAまちなか芸術祭 POART FES」との連携：

同時期(10月4日(土)・5日(日))開催のアーティストイベントとして連携。北村直登によるライブペインティングも行われた。

- ①「おおいた夢色音楽祭2025」との連携:同時期(10月25日(土)・26日(日))に大分市中心市街地の各所に設置したストリートステージで開催される音楽イベント。10月26日(日)には、んまつーボスがダンスパフォーマンスを披露。同日に九州電力大分支店の海老原靖「Hands」の作品の前で大分市の姉妹都市であるオースティン市のアーティストによる演奏が行われた。

## 2. アートと経済の好循環モデルの創出

作品販売や関連グッズの販売、クラウドファンディングの活用、地元企業とのコラボレーションなどを通じて、アートが持つ経済的な価値を最大化し、地域経済全体を活性化させる「アートと経済の好循環モデル」を構築。文化芸術の創造性を活かして、地域の誇りと魅力を再発見するだけでなく、持続可能なまちづくりの新たなモデルケースとなることを目指し取り組んだ。以下にその主なものを列記する。

- ・クラウドファンディング:アートフェスティバルのコンテンツを拡充させ、イベント全体をさらに盛り上げることを目的とするクラウドファンディングを実施した。
- ・「回遊劇場w@nder」公式グッズの販売を試みた。
- ・上記⑤⑥⑦⑧

## 4. 事業運営体制の実相

— 行政と専門家の協働が生み出したもの、そして見えてきた課題

### 1. 行政主導型アートフェスティバルという特異性

「回遊劇場w@nder」は、アーティストや作品の力だけで成立した事業ではない。その背後には、本事業を支えた独自の運営体制と、行政と専門家が協働するプロセスがあったことを、ここであらためて記しておきたい。

本事業は、大分市商工労政課が所管する「アートを活かしたまちづくり事業」の一環として実施されたものであり、国内外の多くの芸術祭が美術館学芸員やアートNPO、専門プロデューサーを中心に構成される体制とは異なり、行政職員が主体となって企画・運営を担う点に大きな特徴がある。

### 2. 少人数体制から始まった企画と専門的補完

アートフェスティバル開催前年度において、本事業の実務は、限られた人数の担当者を中心に進められた。これまで継続的に本事業に関わってきた職員の知見を軸としながら、事業全体の方向性については、大分市美術館長がアドバイザーとして関与し、企画内容や作家選定、構成の面で専門的な助言を行った。あわせて、視覚的な表現や情報発信の質を高めるため、グラフィックデザインおよびWEB・コミュニケーション分野の外部専門家が参画し、体制を補完した。

### 3. 開催年度における体制拡充と役割分担の再編

その後、フェスティバル開催年度を迎えるにあたり、事業を取り巻く環境や体制にも変化が生じ、複数の職員が新たに加わることとなった。結果として運営体制は拡充されたものの、アーティストとの継続的な対話や制作進行など、専門性と経験の蓄積が求められる業務については、短期間で一様に分担することが難しい側面もあった。

こうした状況を踏まえ、運営にあたっては、役割分担を柔軟に見直し、アーティスト対応については、これまでの経緯を十分に把握している担当者が継続して関わる一方、クラウドファンディングやボランティア育成、広報関連業務などについては、他のメンバーが担う体制へと調整が行われた。この判断は、限られた条件のもとで事業の質を維持し、円滑な運営を実現するための、現実的かつ重要な選択であったといえる。

### 4. フェーズ別にみるアートフェスティバル運営と

本事業の特徴

一般に、アートフェスティバルの運営は、①初期段階の企画立案・作家選定・交渉、②制作準備と調整、③会期中の運営、という三つのフェーズに大別される。とりわけ①の段階では、美術に関する広範な知識、人脈、そして構想を実現へと導く実行力が不可欠であり、行政職員のみで担うことは現実的ではない。本事業では、この最も重要な役割をディレクターである大分市美術館長が担い、事業全体の骨格を構築した。

②の制作準備段階においても、単なる事務処理を超え、作品内容や作家の意図を理解した上での調整が求められる場面が多く、結果としてディレクターと継続担当職員が密に連携するかたちで進められた。こうした体制は、「おおいたトイレンナーレ2015」において

NPO法人BEPPU PROJECTが担った役割を、行政と美術館が分担するかたちで引き継いできた「回遊劇場」シリーズの延長線上に位置づけられるものである。

### 5. 協働体制の成果と、その脆弱性

一方で、この体制は決して盤石なものではない。アートフェスティバルには、学芸的知見に加え、プロデューサー的視点、マネジメント能力、対外的な調整力が複合的に求められる。美術館学芸員であれば誰もが担える役割ではなく、また、行政職員がクリエイティブな領域に挑戦する意義は大きいものの、持続的に高い水準の事業を展開していくには、現行の体制は極めて脆弱であるという課題も浮き彫りになった。

### 6. 認知と参加の壁 — 広報体制という未解決の課題

さらに、こうした体制のもとで事業は予定通り実施され、質の高い内容が実現した一方、市民や社会における認知は、必ずしも十分であったとは言い難い。アートプラザの60sホールやアートホールの来場者数は、展示内容や入場無料という条件を踏まえると、決して多いとはいえず、本事業の魅力が広く届いていたとはいえない現実を示している。

この背景には、広報体制や情報発信の弱さがあると考えられる。認知が高まれば、来場者の増加にとどまらず、市民の主体的な参加や、事業を応援し、支えたいという関係性の広がりも期待できたはずである。言い換えれば、本事業はその潜在力をまだ十分に引き出し切れていない段階にあるともいえる。

### 7. 今後に向けて

— 運営体制と循環の仕組みをどう育てるか

「回遊劇場w@nder」は、まちの記憶を掘り起こし、人と人、人と場所を結び直す試みであった。その価値を一過性の成果に終わらせず、次の実践へとつなげていくためには、運営体制の再検討とともに、広報・参加・支援を含めた循環の仕組みをいかに育てていくかが、今後の大きな課題となるだろう。

## 5. 「回遊劇場w@nder」とは?

— まちの記憶と出会うアートフェスティバル

「回遊劇場w@nder」は、単にアート作品を都市空間に配置し鑑賞させることを目的としたアートフェスティバルではない。それは、まちを歩き、迷い、立ち止まるなかで、その場所に宿る記憶や物語と“出会う”

体験そのものを重視した試みであった。

これまでの「回遊劇場」が都市空間へのアートの設置による回遊性を提示してきたのに対し、本事業ではさらに一歩踏み込み、大分の地面の下に眠る「記憶」や、「ゲニウス・ロキ」(土地の精霊)に焦点を当てた。アーティストという媒介者の視点を通じて、都市に折り重なってきた歴史や人々の営みを読み解き、現代の風景に多層的な意味を呼び戻したのである。

観客がまちを「wander(さまよう)」なかで、ふと出会う「wonder(驚き)」。JR大分駅に現れた異形の《キメラブネ》や、トキハ本店の壁面に描かれたひまわり、そして故・佐藤雅晴氏の志を継ぐ作家たちが紡いだ物語は、見慣れた日常の風景を、豊かな物語が息づく「劇場」へと変容させた。

また、本事業では市民や地元企業との「共創」が大きな実を結んだ。学生によるシャッターアート、ボランティアによるアートツアー、地元百貨店や鉄道会社などの企業との連携、さらにはクラウドファンディングを通じた支援。これらの多様な関わりは、アートが地域経済やコミュニティと共鳴し、持続可能なまちづくりのエンジンとなり得ることを証明したといえる。

しかし、この「驚き」を一過性の祝祭に留めてはならない。創造的な人材や市民の関わりをいかに持続させ、今回掘り起こされた地域の記憶を次世代へ継承していくか。アートと経済の関係をより健全な循環として育てていくためには、さらなる工夫と検証が必要である。

「おおいたトイレンナーレ2015」から始まった本プロジェクトの歩みは、螺旋(SPIRAL)を描くように深化を続けてきた。アートはまちに新たな価値を“与える”のではなく、すでにそこにあるものに気づくための視点を“ひらく”力を持っている。本事業で生まれた出会いと発見を、螺旋(SPIRAL)を描くように次の実践へと重ねながら、都市の記憶とともに更新し続けることこそが、「回遊劇場w@nder」の役割である。

# ARTISTS

## 参加アーティスト

メイン会場であるアートプラザのほか、JR大分駅、トキハ本店、シネマ5、九州電力大分支店ビル、コンパルホールなどに10組のアーティストが作品を展示した。

### ザ・キャビンカンパニー

THE CABIN COMPANY

### 林ナツミ

HAYASHI Natsumi

### 藤田洋平

FUJITA Yohei

### 海老原靖

EBIHARA Yasushi

### 鈴木康広

SUZUKI Yasuhiro

### 藤堂

TODO

### 大垣美穂子

OGAKI Mihoko

### 井原信次

IHARA Shinji

### んまつーポス

namstrops

### 北村直登

KITAMURA Naoto



## ARTIST 1

### ザ・キャビンカンパニー

THE CABIN COMPANY

### 『キメラブネ』

鉄芯、新聞紙、ダンボール、スチロール、  
アクリル絵具、木工用ボンド、油性ニス  
2021年

【展示会場】JR大分駅 コンコース [map](#) **A**



#### PROFILE

阿部健太郎と吉岡紗希による二人組の絵本作家/美術家。ともに大分県生まれ。2009年にユニットを結成、活動を開始し、多数の絵本を出版している。現在は、大分県由布市の廃校をアトリエにして、絵本・立体造形・アニメーションなど様々な作品を生み出し、国内外で発表している。



キメラブネは2021年に、大分駅ホームの元喫煙スペースに展示するために制作した「豊後府内」をモチーフにした作品である。

16世紀、南蛮文化の栄えた大分(豊後府内)の地に、虎・象・孔雀など異国の舶来物が数多く持ち込まれた。初めて触れる異貌な世界に、豊後府内の人々は何を思っただろう。

キメラブネは現代に蘇った南蛮船。虎・象・孔雀が混ざり合った怪物を運ぶ船である。2021年の駅ホームの展示では、Twitter(現X)で10万いいねを超える大きな反響をもたらした。その一連の現象は、まるで16世紀の豊後府内の市井の人々が、巨大な象の闊歩する姿を一目見ようと、港へ押し寄せたという逸話の再来のようであった。異文化の到来は、いつも浮世話に花を咲かせる。何を考え、どう動くのか、人々を揺さぶり動かすスイッチとなるのだ。

「回遊劇場w@nder」にて、キメラブネはついに駅ホームを飛び出し、大分駅の改札口まで進航した。キメラブネが我々に運んでくるもの。それは450年前、豊後の国へ運ばれてきたものと同じく「未知と混然と創造」である。



## ARTIST 2

林 ナツミ

HAYASHI Natsumi



### 『本日の浮遊』

インクジェットプリント  
2015年

【展示会場】トキハ本店 1階 [map](#) **B**



Photo by Naoki Morita.

#### PROFILE

写真家／アーティスト。1982年埼玉県生まれ。SNSを起点に作品を世界へ届ける「ネット発信型アーティスト」。代表作『本日の浮遊』は国内外で話題となり、東京都写真美術館にも収蔵。現在は、スマホで街の「見過ごされた美」を採集するシリーズ「SALVATION」をSNSで毎日公開中。裏道歩きと酒をこよなく愛する。写真集『本日の浮遊』（青幻舎）。「さがみはら写真新人奨励賞」受賞。

『本日の浮遊』は、子どもの頃「地に足をつけなさい」と言われ続け、そのまま大人になった自分を捉えるセルフポートレートシリーズである。

多い時は200回以上ジャンプを繰り返し、その瞬間を撮影している。

10年を過ごした大分で、街の幸せの象徴だったトキハのひまわり紙袋を手に、『本日の浮遊』を撮影したいと思った。

そして、いつかこの写真をトキハで展示し、紙袋にしてみたいと夢見た。その願いが叶いました。地に足がつかなかった子どもの頃の私へ。「そのまま大丈夫だよ」

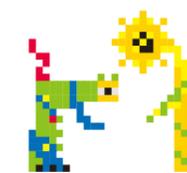
変わりゆく日々のなかで、みなさんの幸福が常葉（ときわ）のようにいついつまでも続きますように。祈りを込めて。



## ARTIST 3

藤田 洋平

FUJITA Yohei



### 『つながるおじぎ』

ペイントフィルム／デジタルプリント  
2025年

【展示会場】トキハ本店 北側外壁 [map](#) **B**



#### PROFILE

美術家。1972年大分県生まれ。1993年武蔵野美術大学短期大学部美術科卒業。2007年「frame out 安部泰輔・藤田洋平・栗原元との3人展〜ヌイグルミ、ドローイング、オブジェのインスタレーション〜」、2010年「平面空間」出品、2016年「まちなかアート遊園地」、2022年「カタスマイカイ芸術祭」、2024年「大分市アートを活かしたまちづくり」ウォールアート制作、国東にてグループ展出品など主に大分県内で制作・活動。

太陽に向かってまっすぐに伸びるひまわりが、やがて実をつけ、深く頭を垂れる。その姿が「お辞儀」をしているように感じたことが、この作品の始まりです。ひまわりの姿を通して「出会い」と「感謝」を表現しており、今回壁画を制作する機会をくださった方々への感謝の気持ちも込めています。また、ひまわりが万国旗のようにつながる様子には、世界中の人々が互いを敬い、平和が続くことへの願いも込めています。この壁画が、温かい気持ちと幸せな出会いをもたらすことを願っています。



『Hands』 キャンバスに油彩  
2025年

【展示会場】シネマ5 [map](#) **C**

亡き友が遺した映像作品“Hands”への応答として、私は絵画という形で「手」を描き続けています。

映画の中で流れ去る仕草や触れあいの一瞬は、絵画に移すことで断片として留まり、人間の営みの記憶として立ち現れます。

この映画館の柿落とし作品がヴィム・ヴェンダース監督の「ベルリン・天使の詩」だったと聞き、私は彼の映画に登場する「手」の場面を集めました。



『Hands』 キャンバスに油彩  
2022~2025年

【展示会場】九州電力 大分支店 [map](#) **D**

人と人が触れ合う一瞬の「手」を描いています。

差し出す、握る、支える、その動作の中に、言葉では届かない関係の全てが宿っているように思えます。作品にしたのは、ただその瞬間を留めたいと思ったからでした。亡き友が遺した映像作品“Hands”に応答しつつ、私自身の記憶や体験とも重なっています。触れることの記憶は個人的でありながら、同時に誰もが持つ普遍性を持つものだと考えます。



『空気の人』 プラスチックフィルム、空気、ポンプ  
2025(2007)年

空気は分子レベルの粒子の集まりでありながら、スケールを超えて大気となり地球にあまねく存在しています。歩くと肌に当たり、息を吹き込むと膨らみ、物体でありながら目に見えない不確かな存在として着目してきました。《空気の人》は、その場所にある空気をしばらくの間、人の形のバルーンに吹き込み、また大気に戻すことで呼吸するように展示を続けてきました。今回は磯崎新氏設計のアートプラザ内、60'sホールの空気を全身に取り込みました。透明な身体が浮いていることで、ふだん焦点を合わせることのない空中に観客の視線を集めます。そして人が周辺視野で捉えている空間の感じ方を変容させます。空気の流れや電気など、エネルギー輸送の構造と設備系が一体となって設計された空間の中で、《空気の人》もまた建築空間の1つのエレメントとして機能し、あらたな発見を誘発することを期待しています。



『まばたきの葉』 紙、FRP、送風機、木材  
2003年

紙製の葉の片面には開いた目を、もう片面には閉じた目がプリントされています。来場者が葉を集めて円筒の穴に差し込むと、瞬く間に吹き上がり、空中でくるくると回転し「まばたき」をしているように見えます。アニメーションの原理と残像現象への関心が結実して生まれた、活動初期の代表作です。円筒を「幹」に見立てることで、その時々吹き上がる葉とともに、目に見えない「枝」が瞬間的に張りめぐらされているイメージが頭の中に浮かびました。落葉のサイクルをわずか数十秒間で再現する一方で、1枚1枚の葉にはゆっくりとした時間が流れています。建築家・磯崎新氏が建築を「未完成な状況」とみなす方法で設計したアートプラザ(旧大分県立図書館)に、来場者の参加とともに成立する《まばたきの葉》が置かれることもまた、その設計プロセスと言えるのかもしれませんが。空気を媒介に、建築空間は呼吸するように動き出し、そこに訪れた人との間にさまざまな時間が折り重なっていきます。

ARTIST 4

海老原 靖

EBIHARA Yasushi



PROFILE

美術家。1976年茨城県生まれ。2001年東京藝術大学大学院修士課程修了。茨城県を拠点に活動。映画のワンシーンを切り取った「NOISEシリーズ」、1990年代に爆発的人気を得た子役の象徴的存在を描いた「MACAULAY CULKINシリーズ」など、消費され消えゆくものをモチーフに、繊細な筆のタッチで何層にも重ねられた油絵の他、立体、写真、パフォーマンスなど様々なメディアで作品を発表。

Photo by Yusuke komiyama(mobile,inc.)



ARTIST 5

鈴木 康広

SUZUKI Yasuhiro



PROFILE

アーティスト。1979年静岡県生まれ。日常の見慣れた事象に新鮮な切り口を与え、誰もがもつ個別の感覚や記憶を呼び覚ます作品を制作。代表作に《まばたきの葉》《空気の人》《ファスナーの船》などがある。国内外の美術館で個展を開催、第1回ロンドン・デザイン・ビエンナーレ(2016)では、日本代表を務めた。十和田市現代美術館への収蔵をはじめ、公共空間への常設展示も多数展開している。

Photo by Timothee Lambrecq

【展示会場】アートプラザ [map](#) **E**



『九石柱』 石、積層ガラス 2025年

石という素材は、地球上で一番古いマテリアルであり、その場所の歴史・風土・文化などが記憶されているDNAのようなものだと考えています。大分は、古来より豊後水道を通していろいろな場所の人々との交流があったであろうから、様々な場所(別府、臼杵、愛媛、徳島、ドイツ等)の石に積層ガラスをはめこんだ作品を作りました。石と石の間に挟まれた透明なガラス(窓ガラスの積層)を通して、それぞれの場所の暮らしや文化、自然や歴史などいろいろな事柄を想像することができたとしたら嬉しい。



『ドッキング青石-関崎(大分)+佐田岬(愛媛)』

大分県関崎と愛媛県佐田岬の石、積層ガラス 2025年

大分と愛媛(私は宇和島市出身)は近くて遠い隣県。関崎と佐田岬の石を並べてみると共に緑色で似てて興味深い。両県がかつて陸続きだったことを想像する作品。



『NTT府内ビル別館  
(旧逓信省大分郵便局電話分室)』

瓦礫、積層ガラス  
2025年

都市の記憶を含んだ建物の破片に積層ガラスを挟んだ作品。



『集積層木箱空間』 木箱、板ガラス 2025年

古い木箱も石や古書と同様、それが使われてた場所や時代を表してて興味深い。特定の目的のために作られた小さな空間を内包する様々な木箱を集めて積層して壁にはめ込んだ作品。



PROFILE

彫刻家。1969年東京生まれ宇和島市出身。1997年多摩美術大学大学院彫刻専攻修了。1999年デュッセルドルフ芸術大学入学、2003年ダニエル・ビュレン教授よりマイスターシューラー(M.A.)取得。自ら歩いて集めた欧米や日本の石を切断し、その切断面にガラスを埋め込み磨き上げた作品がよく知られており、「場所・時間・空間・歴史・積層」をテーマに制作活動を続けている。



【展示会場】アートプラザ map E



(左から)

『「空間へ」 by 磯崎新』 本のカバー、積層ガラス 2025年

磯崎新の著書に積層ガラスを挟んだ作品。

『「建築の解体」 by 磯崎新』 本のカバー、積層ガラス 2025年

磯崎新の著書に積層ガラスを挟んだ作品。

『桂花舎外塀赤レンガ』 レンガ瓦礫、積層ガラス 2024年

白井晟一が設計した個人邸「桂花舎」の外壁破片を使った作品。

『「無窓」 by 白井晟一』 本のカバー、積層ガラス 2025年

磯崎新が影響を受けた建築家・白井晟一の著書に積層ガラスを挟んだ作品。



『光線の筒』 天窓、カラーフィルム 2025年

磯崎新が自著「空間へ」でヨーロッパの採光について書いてるところにて、ル・コルビュジエが好んで用いる「canon de lumiere」に触れてる記述からインスピレーション。



『一輪挿し - 小鹿田焼 / 改』

焼物、積層ガラス 2025年

地場の土を使った焼物もまた石同様に、その場所の歴史・風土・文化などが記憶されているDNAのようなものだと思う。



(左から)

『オマージュ作品ーガイコツ』 佐藤雅晴の個展カタログ(原美術館)、ガイコツのオブジェ、積層ガラス 2018年

大分県臼杵市出身のアーティスト佐藤雅晴(1973~2019)に捧ぐ。

『ドローイング\_01März2015\_メモトモリ』

アクリル絵の具・ペン・紙 2015年

『祈祷書』 本のカバー、積層ガラス 2018年

キリシタン大名に捧ぐ。



ARTIST 7

大垣 美穂子

OGAKI Mihoko



『Milky Way - a wave of humanity』

和紙、墨汁、胡粉  
2022年

【展示会場】アートプラザ [map](#) **E**



PROFILE

美術家。1973年富山県生まれ。1995年に愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻を卒業。1996年からドイツ国立デュッセルドルフ・クンストアカデミーに留学。2004年に同大学を卒業し、ドイツで活動した後、2010年に拠点を日本に移し活動。

様々な国籍、ジェンダー、皮膚の色、言語、宗教をもった周りの人物の名前から一文字を選び(例えば正、雅、老、洲、美、F、üなど)、それらを古代文字で和紙に墨の大筆で表し、その上から包み込むように白の胡粉で銀河を描いています。全体では135枚に及ぶ一枚一枚のドローイングを繋いでゆき、ギャラリースペースの天井では静謐に風になびく、大きな一つの波を表現します。



ARTIST 8

井原 信次

IHARA Shinji



『マリー』

ミクストメディア  
2025年

【展示会場】アートプラザ [map](#) **E**



Photo by David Parry

PROFILE

美術家。1987年福岡県生まれ。2012年、東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了。近年の主な展覧会:2021年「美男におわす」(埼玉県立近代美術館、島根県立石見美術館)/2021年「Love Your Neighbor」(KEN NAKAHASHI、東京)/2020年「SILVER LINING」(Hiroshima Drawing Lab、広島)、主なパブリック・コレクション:広島市立大学芸術資料館/ルチアーノ・ベネトン・コレクション

高さ2メートルのガイコツ型立体《マリー》は、白く削り出された外側と、死者の日を思わせるマリーゴールド色の内部をもつ参加型アート作品です。子どもは中へ入り、大人は目の穴から覗き込みながら、来場者は花紙で花をつくり、一輪ずつ内部に飾っていきます。花が増える過程は祈りと祝祭を映し出し、生と死の循環を示します。会期を通じてその姿は静かに変化し、空洞はやがて人々の思いや記憶が重なり合う場となります。

本作は、白杵市出身のアーティスト・佐藤雅晴(1973-2019)の遺作《ガイコツ》との出会いや、作家が父の病と向き合った時間を背景に生まれました。ぜひ会場で花をつくり、《マリー》の物語に参加してください。



ARTIST 9

んまつーポス

namstrops



## 『短編集「竹を切る人の物語」 ～日本最古のSF作品「竹取物語」より』

【パフォーマンス会場】

・ガレリア竹町ドーム広場 ・若草公園 ・ふないアクアパーク



Photo by ryoichi kojima

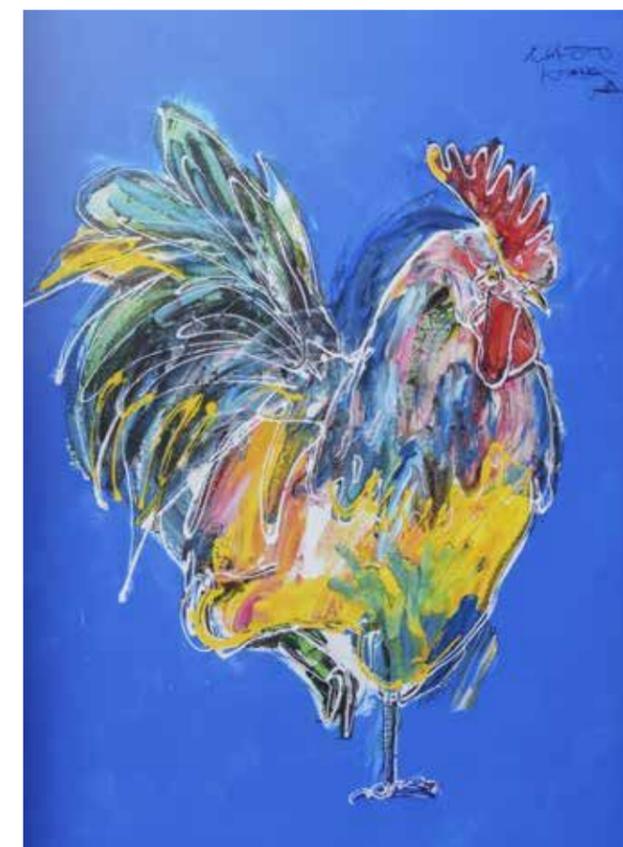
### PROFILE

2006年、「んまつーポス」(namstrops)結成。逆さにこだわったダンスカンパニー。「逆さから物事を考えることで新たな価値を創造する」実践的研究を展開。カンパニー名もスポーツマンの逆さ読み。2008・2011・2012年の横浜ダンスコレクションファイナリスト。これまでにアジアの国・都市はもとよりアメリカ、エストニア、ルーマニア、ドイツ、クロアチア等(17カ国45都市)で作品を発表。今回の映像制作は、専属作家の西純之介と豊福彩乃によるもの。

『竹を切る人の物語』は、星新一による現代語訳『竹取物語』を原作にした、11名(踊る人・踊らない人)の創作ダンス(コンテンポラリーダンス)です。作中では、さまざまなものが「竹」と結びつきながら場と出会い、物語が展開していきます。気が強く、決して自分を曲げない「かぐや姫」に翻弄される高貴な男たち。彼らの失恋が、まるでリレーのように繰り返されていく様子は、「月の鏡」の下で繰り返されます。

「月の鏡」とは、澄んだ秋の夜空に浮かぶ満月を鏡にたとえた秋の季語。

日本最古のSF「竹取物語」に、ダンスという身体表現で、新たな命を吹き込みました。



ARTIST 10

北村 直登

KITAMURA Naoto



## 『ひとめぐりのなかまたち』

ミクストメディア

2025年

【展示会場】コンパルホール map F



### PROFILE

福岡県春日市出身。地下道から始まった画家生活。一生続けられるものを仕事にと2004年に画家になることを決意。それまではプロサッカー選手を目指しブラジルへ留学するなど絵を描くことは無縁の人生を送っていた。路上販売から少しずつ知名度をあげていき、2014年のフジテレビドラマ「昼顔」への作画提供を機に名前は全国区へ。大分を中心に、企業や自治体とのコラボレーションやプロダクト制作、全国の百貨店での催事やギャラリー・美術館での個展を行いながら日々制作を続けている。

干支の仲間をぐるっと並べてみたら、そこに「時間の流れ」とか「人とのつながり」みたいなものが自然に見えてきました。街を歩いていて、ふと懐かしい風景や、見過ごしてた面白さに出会うことがあるように、この絵の十二支たちも、歩く人にちょっとした“wander(さまよう)”や“wonder(驚き)”を届けてくれると思います。気ままに街を回遊するように、絵の中の仲間たちとも出会って楽しんでもらえたらうれしいです。



## WALL ART 大分駅前ウォールアート

JR大分駅前にもアート作品が登場し、大分ゆかりの作家や学生の作品など、大きなウォールアートで彩られた。  
「SATOSHI(スプレーアート)」のライブペインティング(9月27日)も開催した。

**北村 直登**  
KITAMURA Naoto

**パラボラ舎**  
Parabola-Sha

**SATOSHI**

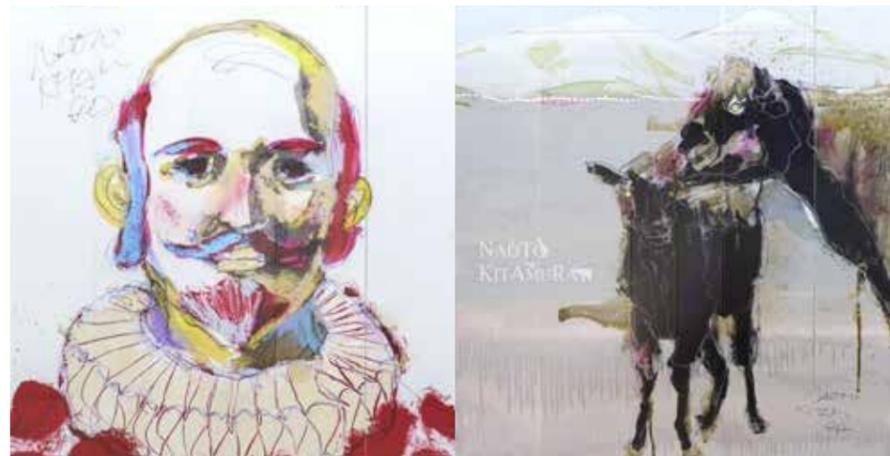
**河野 真歩**  
KAWANO Maho

**大分県立芸術文化短期大学**  
OITA PREFECTURAL COLLEGE  
OF ARTS AND CULTURE

【展示場所】大分駅前仮囲い [map](#) [G](#)

## WALL ART 1

**北村 直登**  
KITAMURA Naoto



大友宗麟は大分のスター。和牛は大分のごちそう。  
歴史と食文化、どちらも大分を語る上で欠かせないもの。  
並べると街がちょっと楽しく見える気がしました。

### PROFILE

福岡県春日市出身。地下道から始まった画家生活。一生続けられるものを仕事と2004年に画家になることを決意。それまではプロサッカー選手を目指しブラジルへ留学するなど絵を描くことは無縁の人生を送っていた。路上販売から少しずつ知名度をあげていき、2014年のフジテレビドラマ「昼顔」への作画提供を機に名前は全国区へ。大分を中心に、企業や自治体とのコラボレーションやプロダクト制作、全国の百貨店での催事やギャラリー・美術館での個展を行いながら日々制作を続けている。現在はSNSでの活動も積極的に行っており、物語にのせて描かれる作品は老若男女問わず人気を集めている。動画の総再生数は、3億回を超える。

## WALL ART 2

**パラボラ舎**  
Parabola-Sha



### PROFILE

たなかみのる(デザイナー)

1984年 大分県生まれ。成安造形大学 彫刻クラス卒業後、電機メーカーに勤務。2009年に広報・デザインのパラボラ舎を設立し、デザイン業に携わる。印刷物のできるまでを体験できる「版フェス」の企画や、防災の知識を家族で楽しく学ぶ「こどもボウサイ(大分市エリア)」、ファブラボ大分との「ダンボール紙相撲」ワークショップなど、デザインをコミュニケーションのツールとして活動している。



大分市には「大志生木」「ななせ」の廃校跡をアトリエとして活動するアーティストが実は身近にいます。アーティストの作品の魅力がそのまま届くようデザインを担当しました。このアートフェンスが通勤・通学・買い物といった日常生活の場であう「おっ!?なんだろう?!」になりますように。

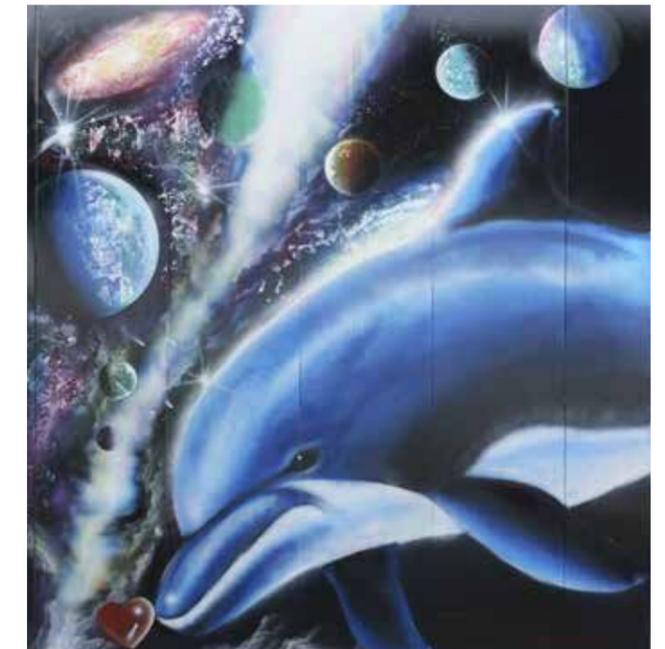
## WALL ART 3

**SATOSHI**



### PROFILE

大分県白杵市野津町で活動中のスプレーアーティスト。亡き弟さんの意志を引き継ぎ、スプレーアートと弟の歌声で復興支援などにも積極的に行い、子供施設、病院などにスプレーアートを寄付していく活動を展開。作品販売、ライブ パフォーマンスなど活動の幅は多岐にわたる。ライブペイントなどでは依頼者の意向を組み込みインスピレーションを受けて制作も実施。想像を具現化するアーティスト。



塗料の飛び散りも、偶然の色も、全部リアルな瞬間。  
この作品は、無限の自由を描いた想像の具現化。  
個々の感覚で観て感じて楽しんでくれたら嬉しいです。

## WALL ART 4

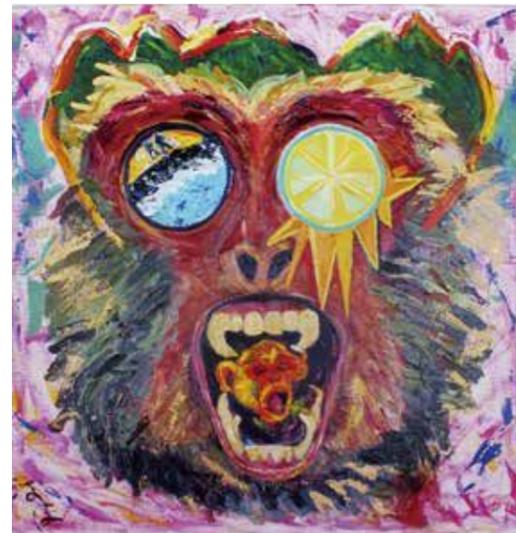
### 河野 真歩

KAWANO Maho



#### PROFILE

株式会社 大分放送(OBS)アナウンサー  
「かぼすタイム」、「マークとまほの今日イ  
チゴルフ」、「えとう窓口のエンジン全  
開」、「まほまいのほろ酔いラジオ」、「おは  
なしワールド」を担当。  
画伯モットー「大分愛を絵筆にのせて」



「命の咆哮」～猿という存在を通して描いたのは、「生命の叫び」と「未来への眼差し」。大きな口から生まれる小猿は、命の循環そのものであり、エネルギーの源泉でもある。しかしその姿は、同時に檻の中に囚われた存在のようにも見える。限られた空間にうずくまりながらも、生まれ落ちようともがく小猿に、「生命の力強さ」と「未来への渴望」を重ねた。左の眼には、まほ画伯の原点＝原動力を。右の眼には、まだ形を成さない「未来」への希望を込めた。さらに、30周年を迎えた「かぼすタイム」を象徴する「かぼすの断面」をモチーフに光を散らし、その光は放射しながら広がり、波紋のように人々の“心のふるさと”と重なっていく。通りすがりの一瞬にさえ、小さな火を灯すことを願って…。

## PUBLIC ART 一般公募パブリックアート

「回遊劇場w@nder」の開催にあたり、シャッターアート作品を募集。応募のあった13作品の中から、「大分の歴史や魅力を連想させ、見た人をw@nderさせる」2作品がパブリックアートとして加わった。

### 市川 陽加

ICHIKAWA Haruka



#### 『あたたかい時間』

水彩塗料  
2025年

#### 【展示場所】

ローソン大分竹町通り店  
シャッター

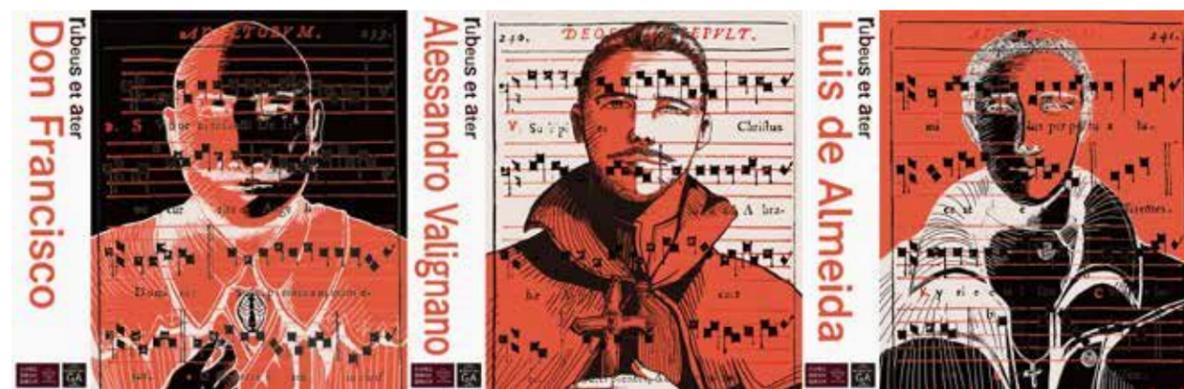


#### PROFILE

2005年佐賀県生まれ。大分県立芸術文化短期大学デザイン専攻グラフィックアートコース所属。大学で版画制作・活動。

#### 「何気ない時間」

大分のモチーフである高崎山の猿と温泉を用いて描きました。親子の猿たちが温泉に浸かって閑談している様子を表しています。親子がのんびりと過ごす癒しの空間を作り出せるように意識しました。付近を通った人を、少しでも立ち止まって癒すことができたらとても嬉しいです。



## WALL ART 5

### 大分県立芸術文化短期大学

#### PROFILE

大分県立芸術文化短期大学は、地域と共に歩む芸術・文化の拠点として活動を続けています。音楽科・美術科を中心に専門的な教育を行うだけでなく、市民に親しまれる発表や企画を積極的に展開してきました。この作品を手がけた、美術科グラフィックアートコースでは、公共空間や展示を通じて地域に関わり、街の文化的な風景づくりに寄与しています。さらに近年は、海外の大学やアーティストとの交流を進め、国際的な視点を取り入れながら新しい学びと実践を重ねています。地域と世界を結び、文化を未来へとつなげる学びの拠点とした存在の価値を高めています。

タイトル「rubeus et ater(赤と黒)」は、出会いと対立、希望と葛藤と言った相反する要素を象徴してしています。ヴァリニャーノ、ドン・フランシスコ、アルメイダ三名の肖像を通し、東西交流の歴史を現代に映し出す試みです。肖像は単なる個の記録にとどまらず、時代を越えて文化的調和や背景を映す「鏡」となります。彼らは異文化の狭間に立ち、対話と調和を模索した先駆者であり、大分が世界と交わり、新たな価値観を受け入れた証でもあります。その姿は今日のウェルビーイングの理念とも響き合います。往来する人々の風景の中で、過去と未来を結ぶ象徴として作用し、地域に眠る文化の奥深さを再認識させるでしょう。

### 安楽 悠陽

ANRAKU Haruhi



#### 『包まれろ、カボス!』

水彩塗料  
2025年

#### 【展示場所】

ボン・フルール カガシヤ  
シャッター



#### PROFILE

2005年鹿児島県生まれ。大分県立芸術文化短期大学デザイン専攻グラフィックアートコース所属。ウサギをモチーフに、シルクスクリーンを中心とした版画作品を制作している。

大分の特産品であるカボスと温泉をテーマに、ウサギたちが自由気ままに楽しむ様子を描きました。にぎやかに遊ぶウサギたちと明るくポップな配色によって、通りかかる人が思わず笑顔になるような空間を目指しました。



# ART EVENT アートイベント

アーティストによるトークショー、ワークショップ、パフォーマンスのほか、ディレクターやボランティアスタッフによるアートツアーを開催した。

ART EVENT 1 日時 9/27(土) 9:00~18:00 場所 ガレリア竹町ドーム広場

## 鈴木康広の巨大な「空気の人」がまちなかに登場!

アーティスト鈴木康広の作品で、全長25mの巨大な「空気の人」を展示したほか、鈴木による作品解説を含めたミニトークショーも行った。



ART EVENT 2

## アーティストトーク

日時 9/28(日) 11:00~12:30

場所 アートプラザ アートホール



「回遊劇場w@nder」の参加アーティストの中から、大分県出身のアーティスト佐藤雅晴につながるの方々をお呼びし、本アートフェスティバルにおける展示作品の制作秘話や大分滞在中に感じたことについて語ってもらった。

登壇者:

海老原靖(美術家)

藤堂(彫刻家)

大垣美穂子(美術家)

井原信次(美術家)

宇都宮壽ディレクター

ART EVENT 3

## 北村直登

## ライブペインティング

日時 10/5(日) 14:00~16:00

場所 JR大分駅前広場特設ステージ

10/4(土)・5(日)で開催された「OITAまちなか芸術祭 POART FES」と連携し、同イベントステージにて北村直登(画家)によるライブペインティングを開催した。およそ1時間で4作品を描いたのち、サイン会も行った。



ART EVENT 4 日時 10/11(土) 13:30~14:30 場所 ガレリア竹町 ドーム広場

## ザ・キャビンカンパニー トークショー



大分で生まれ育ち、大分を拠点に活動する絵本作家・美術家のザ・キャビンカンパニーの黎明期から現在までの歩みと大分のアートシーンについて、宇都宮ディレクターを交えてトークを展開した。また、彼らの絵本デビュー作である『だいたいおういかのいかたろう』の読み語りのほか、会場内で販売された絵本の購入者を対象にサイン会を行った。

ART EVENT 5 日時 10/11(土) 15:00~16:30  
10/12(日)・13(月・祝) 14:00~15:30

## んまつーポス ダンスパフォーマンス

場所 ・ガレリア竹町ドーム広場  
・若草公園  
・ふないアクアパーク



宮崎を拠点に活動するダンスカンパニーんまつーポスによる、『短編集「竹を切る人の物語」～日本最古のSF作品「竹取物語」より』のダンスパフォーマンスを行った。まちなかの3つの場所を回遊しながらパフォーマンスをしたほか、10/13~10/26まで映像作品もJRおおいたシティ大型ビジョンで上映した。

ART EVENT 6 日時 10/13(月・祝) 10:30~11:30

場所 アートプラザ出発

## ディレクターズツアー

本アートフェスティバルディレクター宇都宮壽が、ツアー参加者とともにまちを回遊し、まちなかに点在する展示作品と作家の解説を行った。



ART EVENT 7 鈴木康広

## ① ワークショップ 「路上・見立ての散歩」

日時 10/19(日) 10:30~12:50

場所 アートプラザ 研修室



NHK Eテレの教育番組「みたてるふぉーぜ」の総合指導も行うなど「見立て」の名手である鈴木康広による、まちなかの風景やモノが何かに見えてくることの面白さを体感するワークショップを開催した。参加者は路上を散歩しながら写真を撮り、見つけたものを発表。鈴木がそれぞれにコメントするフィードバックも行われた。

## ② トークショー 「空気が建築を立ち上げる —見えるようにする、観察のための対話—」

日時 10/19(日) 15:00~16:30

場所 アートプラザ 60'sホール



本アートフェスティバル参加アーティストである鈴木康広が金沢21世紀美術館レジストラの本橋仁氏をゲストに迎え、自身の活動紹介をするとともに、「空気」と「建築」のそれぞれの立場から、見ること/見えるようにすることをテーマに対談した。

ART EVENT 8 林ナツミ

① トークショー

「写真と私、w@nderな旅は続く  
～『本日の浮遊』と#SALVATION in OITA～」

日時 10/25(土) 11:00～12:30

場所 荷揚複合公共施設6階多目的大会議室



本アートフェスティバル参加アーティストである林ナツミ(写真家)が、2024年に大分で制作したパブリックアート作品「#SALVATION in OITA」と代表シリーズである「本日の浮遊」の制作秘話や自身のことについて、本フェスティバルでの林の展示をディレクションしたデザイナー長門敦を交えてトークを展開した。

② 作家と巡る

「#SALVATION in OITA」  
ツアー

日時 10/25(土) 14:00～15:30

場所 中心市街地



そこにあるの見過ごされてしまう「まちの美」を抽象画のように写真で切り取ったシリーズ「#SALVATION in OITA」の撮影地を作者である林と巡り、発表された作品を見ながら切り取られた場所を探す宝探しのようなツアーを開催した。

ART EVENT 9

ポールさんアートツアー

日時 10/ 4(土) 10:30～11:30  
10/18(土) 14:00～15:00  
10/26(日) 14:30～15:30

場所 中心市街地



これまでのアートフェスティバルでも大活躍したボランティアスタッフの「ポールさん」と一緒に作品を巡り、まちの魅力を再発見するツアーを開催した。

まちなか  
アートギャラリー  
MACHINAKA ART GALLERY

大分市アーティストバンク専用ウェブサイト「POART/ポート」に登録したアーティスト及び生徒・学生が制作した絵画等のアート74作品を、中心市街地の38店舗で展示し販売を行った。来店者が気軽にアートに触れられる空間を創出し、店舗の空間の魅力向上に貢献した。参加アーティストからも「作品を届けやすい場」として喜びの声が寄せられた。



来場者の回遊促進および本フェスティバル全体の満足度向上のため、デジタルスタンプラリーを実施。各イベントやコラボ企画とも連携して多くのスポットを設置し、公式グッズが当たるキャンペーンと併せて、来場者が会期全期間において主体的に楽しめる仕組みを創出した。



## クラウドファンディング

「回遊劇場w@nder」では、初めてクラウドファンディングに挑戦。All or Nothing方式で実施し、目標金額に達することができたため、3つの特別プロジェクトの開催を行った。



### 開催できたプロジェクト

#### 1 ザ・キャビンカンパニー

##### 「キメラブネ文庫」の作成

大分県出身の絵本作家ザ・キャビンカンパニーが今回のアートフェスティバル開催を記念して「キメラブネ文庫」を作成した。(赤レンガ館内Oita Made&タウトナコーヒーコーナーで展示中)

「キメラブネ文庫」とは  
ザ・キャビンカンパニーがこれまでの活動などを通じて影響を受けた書籍を集め、今回のアートフェスティバルのために大分の歴史や文化をモチーフにした限定デザインの専用本棚。(冤書協力:カモシカ書店)



#### 2 林ナツミ

##### #SALVATION in OITA を紐解く特別ツアー

#SALVATION in OITAの作品が生まれた大分市内の撮影地を、作者の林ナツミと一緒に巡るクラウドファンディング限定ツアーを開催。ツアー参加者と同じ目線で作品や大分のまちなかをシェアしたり、林ナツミの撮影風景を見学することができる貴重なツアーとなった。



#### 3 鈴木康広

##### 巨大な「空気の人」が 大分のまちなかに出現!

今回の参加アーティスト:鈴木康広の作品である、巨大な「空気の人」が大分のまちなかに出現し、回遊劇場の舞台である大分のまちなかを訪れた皆さんを特別にお出迎えた。



# COLLABORATION コラボ連携企画

アートフェスティバルの会期中に行われるさまざまなイベントや、協力企業と連携し、コラボレーション企画を開催した。

COLLABO 1 期間 9/27(土)~12/11(木)

## 「W@NDER ART EXPRESS」出発!

883系ソニック運行開始30周年に合わせて、ザ・キャビンカンパニーの作品「キメラブネ」を883系ソニック号にラッピング。特別アート車両「W@NDER ART EXPRESS」となり、博多~大分をアートの架け橋として運行された。



COLLABO 2

## 「トキハ本店」企画

期間 9/26(金)~10/26(日)

### ① 林ナツミ『本日の浮遊』

フォトプリントイベントを  
毎週末開催

「林ナツミ」による写真シリーズ「本日の浮遊」の浮遊写真を真似して、自分の「本日の浮遊」を撮影できるフォトスポットを開設。大分キャノン(株)の協力を得て、スマートフォンで撮影したものをその場でプリントし、壁に貼って作品を盛り上げた。



### ② 「林ナツミ」と「藤田洋平」の作品を

両面にプリントした  
ショッピングバッグを配布

トキハ本店に展示した2作品をプリントしたショッピングバッグを制作し、会期中にトキハ本店でお買い物をされた方、先着5,000名様に無料で配布した。



イメージ

### ③ 大分県立芸術緑ヶ丘高校の

ビジュアルデザイン科の  
作品展示を実施

ビジュアルデザイン科3年の末永奈央さんによる、あみだくじをモチーフにした参加型作品と、ひまわりをデザインした階段アートを展示した。



「よりみちあみだ」



「芽生えから空へ」

## COLLABO 3

### JR九州ウォーキング

日時 9/27(土) 8:30~11:00

場所 JR西大分駅からスタート

JR九州大分駅主催で、西大分駅を出発して、その日に登場した「巨大空気の人」や既存作品など大分アートフェスティバルを回遊し、大分駅にゴールするウォーキングを開催した。



## COLLABO 4

### 大分市が舞台の短編映画

#### 「デイズ~かけがえのない日々~」上映



日時 ①9/28(日) 18:30~19:10、19:30~20:10、20:30~21:10 (舞台挨拶付)  
②10/1(水)~24(金) 18:00以降 週2回  
③10/19(日) 19:00~(舞台挨拶付)

場所 ①J:COM ホルトホール大分 小ホール  
②府内五番街商店街/トヨタカローラ大分 祝祭の広場/Garaway 0(ギャラウェイゼロ)  
③J:COM ホルトホール大分 大ホール



大分市魅力発信アンバサダーである「平川雄一郎」さん脚本・監督のもと、俳優「市原隼人」さんと、同じく魅力発信アンバサダーである女優「財前直見」さんをメインキャストに迎え、全編大分市で撮影された短編映画「デイズ~かけがえのない日々~」を本アートフェスティバルに合わせて上映した。

## COLLABO 5

### おおいたw@nder夜話

日時 10/3(金)・10/17(金)・10/24(金)  
各日 19:00~20:00

場所 府内五番街商店街振興組合 サロン



県内の文化財や芸術文化にかかわる専門家が、大分のまち・アート・歴史の魅力を語るトークイベントに加え、「回遊劇場」の作品を巡る夜のアートツアーを開催した。

## COLLABO 6

### PORT フェス OITAまちなか芸術祭「POART FES」

日時 10/4(土)・5(日)  
11:00~16:00

場所 JR大分駅前広場



大分市アーティストバンク専用ウェブサイト「PORT(ポート)」登録アーティストによるステージイベント、ワークショップ、作品展示&販売などが行われた。10/5のステージイベントでは、本アートフェスティバルの参加アーティスト「北村直登」によるライブペインティングも開催された。

COLLABO 7

## Game Field Oita

日時 10/19(日) 10:00~夕刻

場所 トヨタカローラ大分 祝祭の広場



人気タイトル「VALORANT」を使用した対戦大会を実施するほか、体験コーナーや人気ストリーマー等によるトークステージなど、幅広い世代が楽しめるeスポーツイベントが開催され、「回遊劇場w@nder」のデジタルスタンプラリーのスポットとなった。

## VOLUNTEER STAFF ボランティアスタッフ

### 「ポールさん」

「おおいたトレナーレ2015」や3度の「回遊劇場」で活動したボランティアスタッフの「ポールさん」が、今回もお客様の案内役やイベント運営に大活躍した。丁寧な作品解説は訪れた方に大変好評で、アートフェスティバルになくてはならない存在であった。



COLLABO 8

## おおいた夢色音楽祭2025

日時 10/25(土)・26(日) 10:00~夕刻

場所 トヨタカローラ大分 祝祭の広場 他、市内中心部 各所



大分市中心市街地の各所に設置したストリートステージで、約240組760人のアーティストがポップス、ロック、フォーク、ジャズ、クラシックなど様々なジャンルの演奏を繰り広げる2日間の音楽イベントを開催。10/26には、ガレリア竹町ドーム広場で、本アートフェスティバル参加アーティスト「んまつーぽす」によるパフォーマンスや、九州電力大分支店内の「海老原靖」作品前でギターの演奏が行われた。

## OFFICIAL GOODS

### 公式グッズ

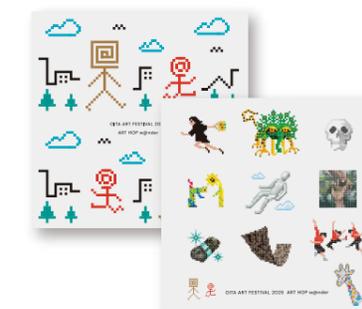
アートフェスティバルの周知および収益化を図るため、「回遊劇場w@nder」のロゴマークやキャラクターがデザインされた公式グッズを制作し、アートプラザ・トキハ本店・大分市観光案内所・大分市美術館の市内4カ所にて販売した。



Tシャツ



ハンディファン (充電式/スタンド付き)



ハンドタオル(2種)



ラバーキーホルダー(2種)

# PUBLIC ART パブリックアート

Googleマイマップ



まちなかに点在するパブリックアートも見どころのひとつ。



巻末 map  
**1** 井川 惺亮  
《Peinture》  
小鹿公園トイレ壁面  
(末広町2-3-13)



巻末 map  
**2** 埴 雅夫  
《見護る牡丹》  
キムラヤビル西側壁面  
(中央町3-6-10)



巻末 map  
**3** 谷川 広人  
《廻る》  
親進舎ガレージ シャッター  
(中央町3-2-21)



巻末 map  
**11** 鈴木 ヒラク  
《点が線の夢を見る》  
大分市中央通り線地下道



巻末 map  
**12** 林 ナツミ  
《#SALVATION in OITA》  
大分銀行赤レンガ館内  
(府内町2-2-1)



巻末 map  
**13** 前田 信明  
《2021 OITA PROJECT  
-VERTICAL AND HORIZONTAL》  
イデアビル東側壁面  
(府内町3-2-25)



巻末 map  
**4** 藤田 洋平  
《ガレリアの鳥》  
布屋ビル2F壁面  
(中央町3-6-29)



巻末 map  
**6** トマリ アサミ  
《WE ARE HERE, BABY.》  
福田ビル シャッター  
(中央町2-7-21)

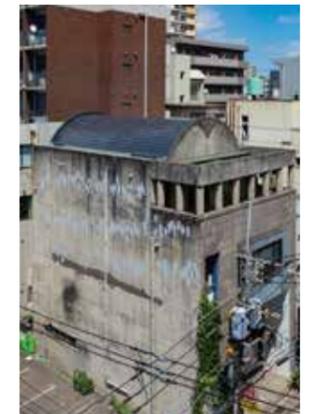
**5 7**  
は24ページに掲載



巻末 map  
**14** 山本 大補  
《garden》  
若竹園倉庫 シャッター  
(府内町2-4-5)



巻末 map  
**15** snipe1  
《aALGORITHM》  
若竹ビル西側壁面  
(府内町2-4-8)



巻末 map  
**17** 国本 泰英  
《Scene》  
Bスクエアビル西側壁面  
(府内町1-6-43)



巻末 map  
**8** トーチカ  
《トイレのラクガキ》  
若草公園トイレ  
(中央町2-4)  
公開時間 17:00~0:00



巻末 map  
**9** Ryu Ambe  
《HAVE YOU EVER BEEN ON A TRIP?》  
おくの細道ビル通路壁面  
(中央町2-6-4)



巻末 map  
**10** こっちゃん  
《にじいろの水族館》  
大一ビル シャッター  
(中央町1-3-12)



巻末 map  
**16** 大平 由香理  
《時を遊ぶ》  
ふないアクアパーク南側溝口ガレージ壁面  
(府内町2-3)



巻末 map  
**18** 宮崎 勇次郎  
《NEW WORLD 府内富士》  
金剛ビル壁面  
(府内町2-6-14)

# 報道記録

## 新聞

- 大分合同新聞 9/24 アート彩る回遊劇場
- 9/25 週間イベント情報
- 9/26~10/26 本日の催し情報
- 9/27 街に溶け込むアート「回遊劇場」スタート
- 9/28 全長25メートル「空気の人」
- 10/2 回遊劇場w@nder 1
- 10/4 1週振り返り 巨大「空気の人」登場
- 10/8 回遊劇場w@nder 2
- 10/9 週間イベント情報
- 10/16 週間イベント情報
- 10/18 回遊劇場w@nder 3
- 10/23 100年トキハ 大分とともに
- 10/24 回遊劇場w@nder 4
- 10/25 トキハ本店彩るひまわり
- 読売新聞 9/28 アートに染まるラッピング特急
- 10/25 夢色音楽祭が25日から開催
- 西日本新聞 9/28 特別運行 怪物「ソニック」

## テレビ

- NHK 9/26 ぶんどキ
- OBS 6/26、9/26、10/7 イブニングプラス
- 7/5、8/9、9/6、9/27、10/4、10/11、10/18、10/25 かぼすタイム
- 9/24 いいやん!大分
- J:COMチャンネル大分 10/6~10 ひるどきdaily

## ラジオ

- OBS 9/28 ムッシュえんようレトロな喫茶店
- 10/15 風は虹色 トピックカー

## 雑誌

- 月刊《シティ情報おおいた》9月号
- 月刊《セーノ!》9月号

## フリーペーパー

- 月刊《生活情報誌モグモグ》9月号

## ニュースレター

- いいやんニュース VoL.17



## WEB

### 〈開催告知〉

- 8/1 ふくおかサポートネット
- 9/1 大分市観光協会HP
- 9/1 アートプラザHP
- 9/1 九州電力大分支店HP
- 9/8 ウェブ版美術手帳
- 9/9 ウォーカープラス
- 9/9 dメニューニュース
- 9/9 駅探
- 9/16 レッツエンジョイ東京
- 9/23、9/26 LOG OITA
- 9/24 株式会社トキハHP
- 9/26 PR TIMES
- 9/26 西日本新聞me
- 9/26 Infoseek
- 9/28 大分経済新聞
- 10/4 マイナビニュース
- 10/6、10/11 株式会社スギタニHP
- 10/7 yahoo!ニュース
- 10/19 地域NEWS号外NET大分市

### 〈クラウドファンディング告知〉

- 8/18 大分まちなかエンジン
- 8/28 アットプレス
- 8/28 エキサイト
- 8/28 ZakII
- 8/28 NEWS CAST
- 8/28 NEWSWEEK
- 〈特急ソニックとのタイアップ〉
- 9/12 PR TIMS
- 9/13 koubo
- 9/22 旅とおでかけ鉄道チャンネル
- 9/28 鉄道ファンrailf.jp
- 〈その他〉
- 9/27 大分合同新聞プレミアムオンラインGate
- まちなかに巨大な「空気の人」出現
- 10/8 大分合同新聞プレミアムオンラインGate
- 大分w@nder夜話開催
- 10/20 大分経済同友会HP
- アートフェスティバル視察の活動報告
- 11/28 NHK WORLD 「Design×Stories」

## 広報活動

### SNS 回遊劇場w@nder公式

- Instagram フォロワー数:800 いいね件数:4410
- Facebook フォロワー数:637 いいね件数:312
- X フォロワー数:123 いいね件数:445
- (2026年1月15日現在)

### 会場案内表示

- アートプラザ会場懸垂幕
- まちなかアートギャラリー吊り旗
- のぼり

### 印刷物

- ポスター/B1 30枚
- ポスター/B2 800枚
- チラシ/A4 両面 15,000部
- ガイドブック/A5・24P 10,000部

### 広告

- 9/1~10/31 デジタルサイネージ
- 8/15~10/26 大分空港デジタルサイネージ
- 9/5~10/26 マルミヤストアデジタルサイネージ
- 8/31 大分トリニータマッチデー
- プログラムバナー
- 9月・10月 大分朝日放送 CM
- 9/1~10/26 柱ポスターフレーム
- (ガレリア竹町通商店街内)
- 市報おおいた9月号

### ノベルティ

- スタッフ用Tシャツ
- ステッカー

## 大分市中心市街地 展示会場MAP



# 遊劇場 w@nder

OITA ART FESTIVAL 2025  
ART HOP w@nder

会期: 2025年9月26日(金) - 10月26日(日) 全31日間

会場: 大分市中心市街地各所

鑑賞者数: 344,061名

主催: 大分市アートを活かしたまちづくり推進会議

名誉会長: 足立信也

会長: 有松一郎

委員: 於保政昭 八坂千景 吉田可愛 正池功

監事: 穴井壯志 児玉憲明

連携協力: アートプラザ トキハ本店 JR九州 シネマ5 コンパルホール  
九州電力大分支店 大分キャノン

後援: 大分県 大分合同新聞社 朝日新聞大分総局 読売新聞社 毎日新聞社  
西日本新聞社 共同通信社 時事通信社大分支局 日刊工業新聞社  
NHK大分放送局 OBS大分放送 TOSテレビ大分 OAB大分朝日放送  
エフエム大分 J:COM大分ケーブルテレコム 月刊・シティ情報おいた  
大分市商店街連合会

ディレクター: 宇都宮壽(大分市美術館館長)

事務局: 大分市商工労働観光部商工労政課

デザイン: 長門 敦(長門デザイン事務所)

ボランティアスタッフ「ポールさん」

相濱芽吹 安部希代美 池田真未 石丸桂子 大塚菜々美 大塚裕司 小笠原幸恵  
奥村啓三 黒木展子 古瀬文美 後藤裕美 佐藤智美 佐藤ひとみ 佐藤凜 島田成子  
園部道代 高橋華音 高山由佳 田中多佳子 富澤史子 富高義和 中野悦子 中山香奈美  
成松奈穂 二宮ちひろ 波多野健志 原修一 廣津佳奈 福富陽美 藤原京子 前田由紀  
溝邊洋子 安見紀子 藪田真緒 横田礼代 吉川史泰 吉原真由美 脇坂ゆう子

OITA ART FESTIVAL 2025

「回遊劇場w@nder」記録集

監修: 宇都宮壽(「回遊劇場w@nder」ディレクター/大分市美術館館長)

編集: 大分市アートを活かしたまちづくり推進会議

デザイン: 長門 敦(長門デザイン事務所)

写真: 久保貴史(ELEMENT)

大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局

発行: 大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局

